

手記

中国帰国者 1 世 草野拓子さん（福島県）

私の名前は草野拓子です。中国満州開拓団の生まれであることから拓子という名前を付けられたと思います。

あの終戦当時、父は旧ソ連に抑留され、3 歳の妹は母の背中で亡くなり、私と母は中国人の養父に拾われました。幸い私は養父に可愛がられ、大学まで上げてもらいました。後、中学校の教師になり、中国で 14 年間勤めて、1979 年に一家で日本に引き揚げて来ました。日本に帰ってきた理由は 3 つありました。

- 1、育てて貰った養父はすでに亡くなり、私には後ろ髪を引かれる様な心配はなくなりました。
- 2、中国の文化大革命という政治運動の中に巻き込まれていました。あの凄まじい政治運動の中で外国人であるがためにいつ自分が批判対象になるのか誰も分からない、日頃つねにはらはらドキドキしている状態でした。まして、当時、学校の先生は自分の教え子に引っ張り出され、両手を後ろに縛り付けられて批判される光景は日常茶飯事だといっても過言ではありませんでしたから。
- 3、毛沢東の発令で農民から再教育を受けるため、中学や高校、大学の卒業生は全員農村に行かされました。もちろん私の子供も、学校を卒業したら農村に行かなければならない。1、2 年過ぎたら皆いろいろな理由をつけ、或いは親の七光りで都会に戻ってこられますが、うちは外国人の親であるため、一生農村から戻ってこられない可能性もあるのです。

以上のことを考えますと、私、いや家族の将来は暗い、見込みがない。だったら日本にと思いました。また、私が小さかった頃、早くに日本へ帰った友達が“やはり自分の祖国が一番いい”と私に手紙をよこしたことを今も覚えています。それから、一時帰国をした母の友達も中国に戻ってきて“日本は働いたら、働いた分全部自分のものになる。一生懸命働き、悪い事さえしなければ何とかなる”とよく口にしたことも覚えています。迷いながら再三考えた末、自分のため、子供のために今までの職業や学歴を全部捨てて日本へ帰ろうと決心をしました。

私達が帰ってきた時、日本はすでに先進国の仲間に入り、経済がウナギ登りに上昇していました。私たちのことは人様の目にはどんなふう映っているのか、すごく気になりました。この素晴らしい国は私達の両手で築きあげたんだよ、お前らは何の貢献もなくどんな顔して帰ってきたの？というようなことを言われたいのかな。と、いろいろと悪い方、悪い方に想像もしていました。

でも、国（日本）は私達帰国者を支援してくれている、一生懸命頑張っ、外に出て、周りの人々に溶け込んでやっていけばきっと認めてくれる。と信じて家族みんな頑張ってきました。もちろんこの間、言葉の壁や人間関係、仕事の不慣れなどなどの苦労は言うまでもありませんが、一つ一つ乗り越えてきました。今、その喜び、その幸せ、その達成感はこの経験を経験を積み重ねてきたからこそ味わえると思っています。

今、二人の子供は大学を出て社会人となり、それぞれ家庭を持ち、パパになっています。私は仕事を退職してからマイホームも持てて、夫と老後を静かに暮らそうと思っていたあの日、未曾有の地震に見舞われ、加えて原発事故、そこから 11ヶ所転々と移動しながらの避難生活を強いられました。さらに、やっと仮設住宅に入り落ち着いて暮らそうと思った矢先、夫に癌が見つかり、末期だと宣告され、私にとっては青天の霹靂のショックでした。神様！不公平じゃないか！どこまで私を引落すつもりなのよ？と叫んだこともありました。しかし、現実に向かわなければならない。二人の息子は中国から戻ってきて、皆で 9ヶ月間、夫（お父さん）と一緒に闘病生活を送りました。

夫が天国に旅立った後、息子たちは職場に戻り、一人になった自分はずらかった。かなしかった。泣いた。夫のところへ行きたいと思った。

ある日、ボランティアに来ていた牧師さんとお話して、私の心を打ち明けました。すると牧師さんは「草野さんね、ここで挫けたら今までの努力は台無しになるじゃないの？草野さんらしくないよ！」といわれ、恥ずかしかった。それから友達も話し相手によくきてくれた。日にちがたって段々気持ちは落ち着き、毎日夫の遺影の前で“般若心経”を読み、反省の心と感謝の心をもって物事を見るようになりました。

日本に帰ってきてから、34 年経ちました。一生懸命働いて生きて来ました。今思うことは沢山あります。小さい頃の友達の話“自分の祖国が一番良い”ということをつくづく実感しました。日本に帰ってきて本当に良かった。

終戦当時、関東軍は満州開拓民を捨てて一番先に日本に逃げて行き、そして私達はやむなく避難民になり、そのため残留邦人になったのです。そして 2011.3.11 の大震災のため、私は二回目の避難生活を強いられましたが、私はむしろ国に感謝しています。全国から、いや世界各地からの支援物資、義捐金、赤十字からの生活用品、仮設住宅、医療費の免除、一部の税金の免除など。避難当初、全国どこに行っても身分証明書さえ提示すれば、即座に引き受けて下さいました。世界中どこの国が国民にこのような優遇を与えてくれることが出来るのでしょうか。本当に心から国に感謝します。昨日のニュースで、安倍総理は残留邦人と会見しました。残留邦人の配偶者の老後のことまで心配して下さいました。感謝、感激で胸がいっぱいです。

今年私はもう 73 歳になりました。あと何年生きられるのかは神様以外にだれも分かりません。私は、神様から与えられた余生の中で一生懸命に生きていくつもりです。大きな夢とか希望はありませんが私なりの小さな願いはあります。人様に手のかかる病気はしたくない。長い、長い寝たきりの闘病生活はしたくない。夫が迎えに来たら、ぼっくり死んで夫についていく。そのために、今私は痴呆症にならないように、毎日頭を使うように、本を読んだり、パソコンをいじったり、お習字の練習をしたり、散歩をしたりして日々を過ごしています。＜人事を尽くして、天命を待つ＞という言葉は、今の私にぴったりだと思います。

最後に福島県庁の封筒に印刷されていた言葉をお借りして私の発言の締めくくりにしたいと思います。生意気な言い方だと思いますが敢えて使います。お許しください。

夢、希望、笑顔に満ちた“新生ふくしま”

夢、希望、笑顔に満ちた“新生草野拓子”

手记

归国者 1 代 草野拓子女士(福岛县)

我叫草野拓子，我想是因为出生在中国满州的开拓团里，因此父母给我起名为拓子吧。

那场战争结束当时，我父亲被旧苏联军扣留，3 岁的妹妹死在母亲的背上，母亲和我被中国人的养父收留。万幸我得到了养父的宠爱，甚至还送我读了大学。此后，我成为中学教师，在中国任教 14 年，全家人于 1979 年返回日本。回日本的理由有三个。

- 1、养育我的养父已经去世，没有什么可值得我牵肠挂肚了。
- 2、我也被卷进了中国的文化大革命这一场政治运动中。难以预料身为外国人的我何时会在那场骇人的政治风暴中成为被批斗的对象，每时每刻都生活在恐惧与不安当中。况且当时，学校的老师被自己的学生揪扯出来，两手被捆绑到背后受到批斗的情形已经是家常便饭，随时发生都言不为过。
- 3、由毛泽东发布指令，中学、高中及大学毕业生全部下放到农村接受农民的再教育。当然，我的孩子在毕业之后也必须去农村。过了 1、2 年之后，大家都以各种理由或倚仗父母的权势返回城市，因为我是外国人或许孩子一辈子都要留在农村。

思前想后，岂止是我就连家人的将来也都前景暗淡、前途渺茫。使我心生了返回日本的想法。还记得在小时候我曾收到过早期回到日本的朋友的来信，信中写到“还是自己的祖国最好”。另外还记得，我母亲的朋友曾经是短期去日本在返回中国时总是听她说“在日本只要工作就会得到应得的报酬，只要不做违法之事，拼命地工作就会有出路。”犹豫再三、经过深思熟虑，为了自己更为了孩子我下定决心放弃迄今为止的职业和学历等等所有一切，毅然选择了回日本。

我们回来的那时候，日本早已步入发达国家的行列，经济正处于直线上升之时。我一直非常担心别人会以怎样的目光来看待我们。会不会被人质问：是我们用自己的双手创造了这个富裕的国家，你们没做出任何贡献有什么脸面回来呢？就这样，脑海里一直胡思乱想着最坏、最坏的情形。

但是，国家(日本)给予了我们归国者以极大的支援，只要拼命努力，积极地融入到周围的人群当中总有一天会得到承认。我和家人坚定着这个信念走了过来。当然，在这期间所经历的语言障碍、人际关系和不熟悉的工作等等许多辛苦都自不待言。但是，我们闯过了重重障碍走到了今天。正是积累的这些许许多多的经验才使我们能够体验现在的这种喜悦、这种幸福、这种成就感。

如今，我的两个孩子都已大学毕业走向社会，各自组织了家庭，成为父亲。我曾向往着在退休之后守着自己的家园，能够和丈夫一起静度晚年。但是那一天，遭受了前所未有的大地震，再加上原子核电站泄漏事故，从那时开始不得已辗转移动了 11 个地方过起了避难生活。就在总算能入住临时住宅可以安稳下来的时候，我丈夫被宣告患了癌症并已进入晚期。这对于我来说真是晴天霹雳。上天！真是太不公平了！你想把我抛进怎样的万丈深渊里呀？我也曾大声呼喊。可是，我必须正视现实。两个儿子从中国返回日本，全家人一起和老伴儿(孩子的父亲)度过了 9 个月的与疾病斗争的生活。

老伴儿去世后，儿子们都重返工作岗位，只剩下我一个人痛苦、悲伤、哭泣，真想到老伴儿那里去与他团圆。

有一天，在与志愿者的牧师聊天时，我向他敞露了自己的胸怀。「草野女士，如果您在这时候灰心丧气，至今为止的努力不全都前功尽弃了吗？这不像是您呀！」这番话让我感到万分惭愧。此后，朋友们也经常过来和我聊天。随着时光的流逝我的心渐渐地平静下来，每天都在老伴儿的遗像前念诵“般若心经”，渐渐地能用反省和感恩之心来对待一切事物了。

回到日本已经 34 年了。拼命地工作终于拥有了今天，如今回想起来真是感慨万千。深切地体会到幼时小伙伴的那番话“还是自己的祖国好”。回到日本真是太对了。

战争结束当时，关东军抛下满洲开拓民最先逃回日本，使我们毫无选择地沦落为难民，因而成为遗华日本人。此后 2011 年 3 月 11 日的大地震虽然使我不得已再次过起了避难生活，但我却反而更感谢国家。从全国乃至世界各地发来了支援物资、捐款、红十字会提供的生活用品、临时住宅、免收医疗费、免收一部分税金等。避难当时，在全国无论去到哪里只要提示身份证明书即可得到相应的接待。试问，世界上有哪一个国家会对自己的国民以如此之待遇。真是从心底里感谢国家。从今天的新闻里获悉安倍总理会见了遗华日本人，甚至对遗华日本人配偶者们的晚年生活也予以了极大的关怀。我心中真是充满了感谢、感激。

我今年已经 73 岁了。除了上天以外谁知道还有多少寿命呢。我将不负上天留给我的有生之年。我没有什么宏大的梦想和期望，只拥有自己的一点小小的愿望。不希望因生病而给别人带来麻烦。不希望过那种漫长而又漫长、卧床不起、与疾病相伴的生活。如果老伴儿来接我，我将毫无留恋地追随老伴儿而去。因此，现在为防止老年痴呆，我每天都在锻炼大脑，读书、摆弄电脑、练习写字以及散步等等。<尽人力，听天命>这句话正是我现在的真实写照。

最后，借用印在福岛县厅信封上的一段话作为我发言的结束。也许会让人感觉自大妄为但请允许我冒昧使用。

充满梦想、希望、笑脸的“新生福岛”

充满梦想、希望、笑脸的“新生草野拓子”